



今、目覚める! 菊池本城の記憶

令和4年 3月13日 **日** 13:30～15:40
(13:00開場)

場所 泗水公民館 大研修室 菊池市泗水町豊水3565番地

参加
無料



報告・講演1 13:40～14:20

「菊之城跡周辺の 考古学調査成果」

西住 欣一郎

菊池市教育委員会 生涯学習課 歴史教育専門員



報告・講演2 14:20～15:00

「中世菊池氏の 歴史的な位置」

稲葉 継陽

熊本大学永青文庫研究センター長



第1部

15:10～15:40

皆さまからのご質問に報告者が回答します

※事前にご質問いただくと、より詳しい回答ができます。

第2部

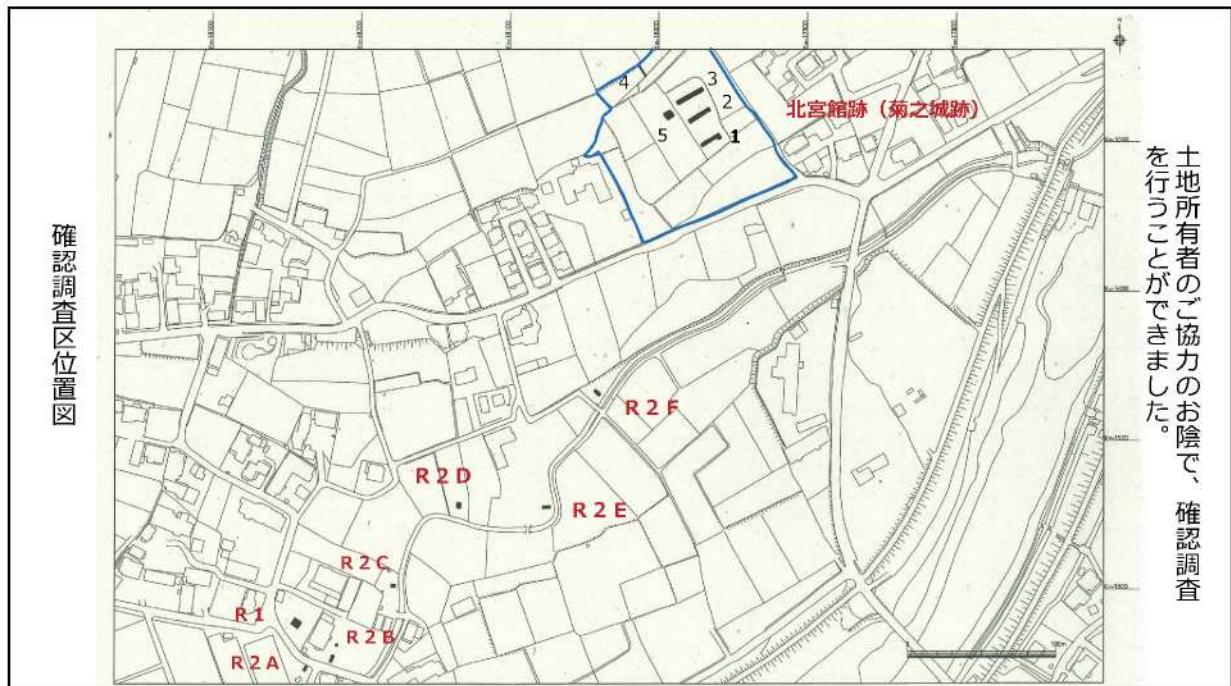
令和4年3月13日

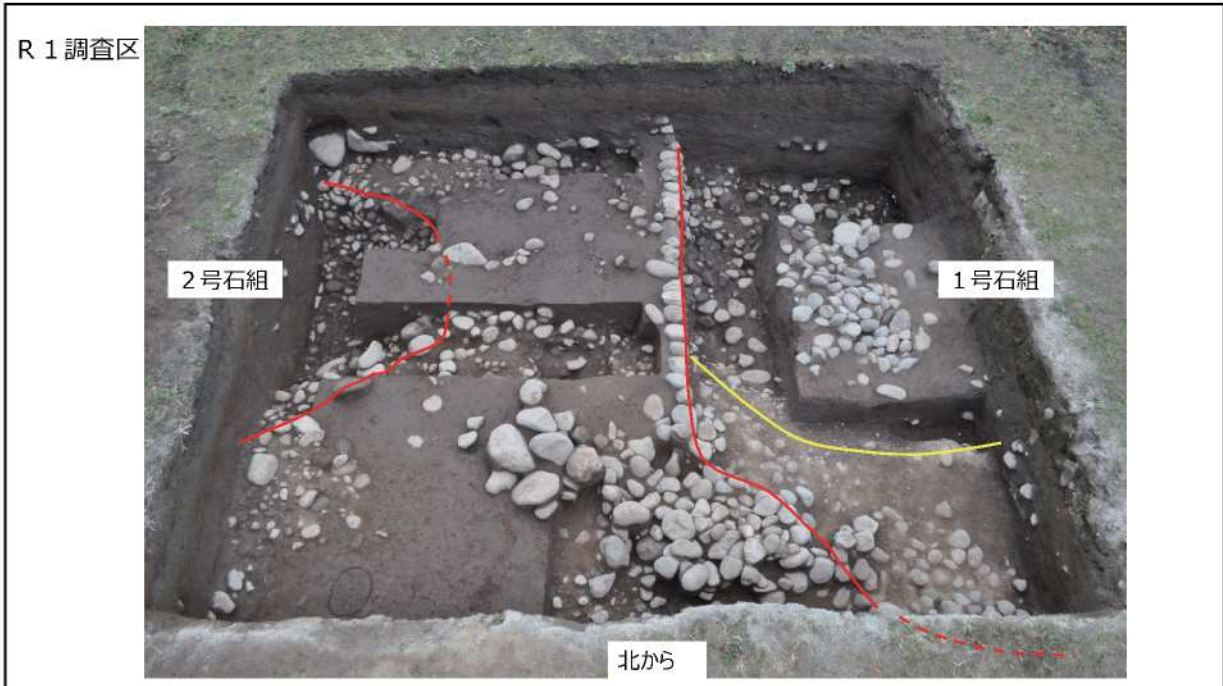
令和3年度 肥後古代の森協議会 菊之城跡周辺の確認調査成果報告講演会

菊之城跡周辺の考古学調査成果

菊池市教育委員会 生涯学習課

歴史教育専門員 西住欣一郎





R 1 調査区検出遺構平面実測図

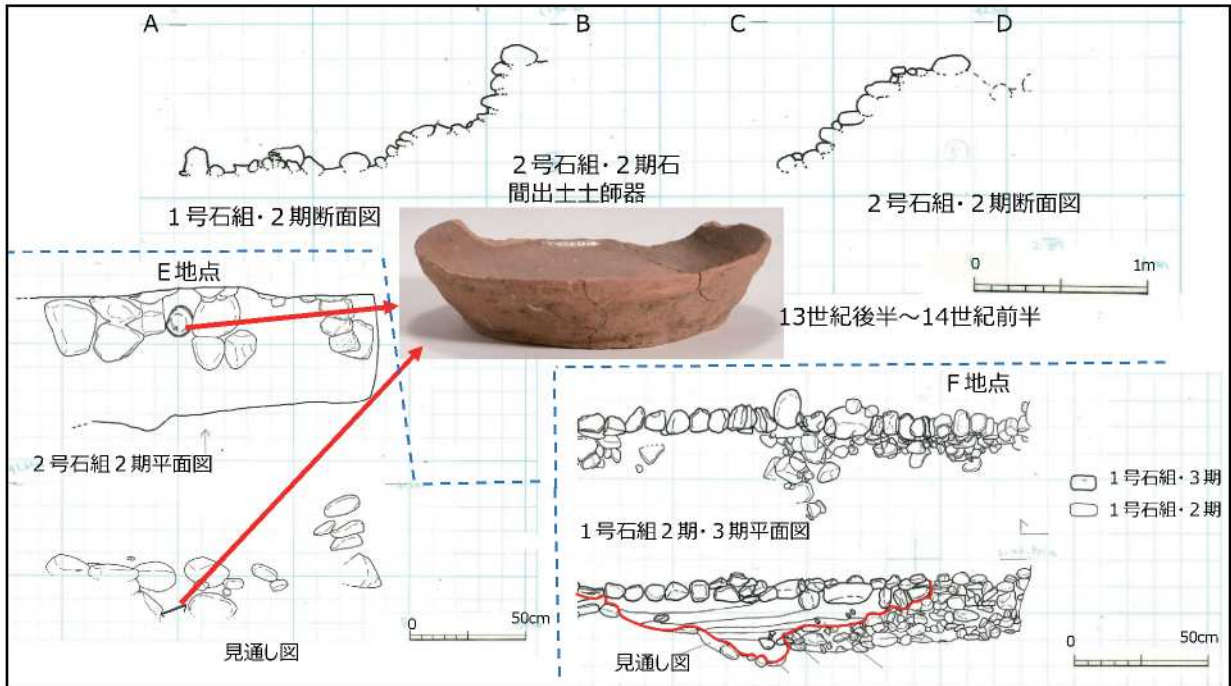
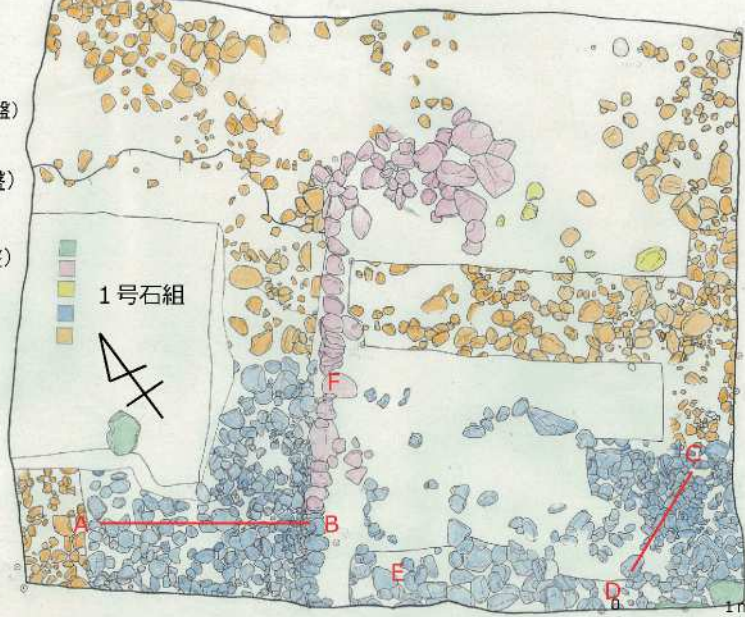
土層略図

砂①②	3期 (砂①・砂②層基盤) 部分的な修復
V層	2期(V層基盤)
VI層	1期(VI層基盤)

石組は壁だけではなく、底面も石を敷き詰めている。



石組の大きさから、小舟の舟着場と考えられる。

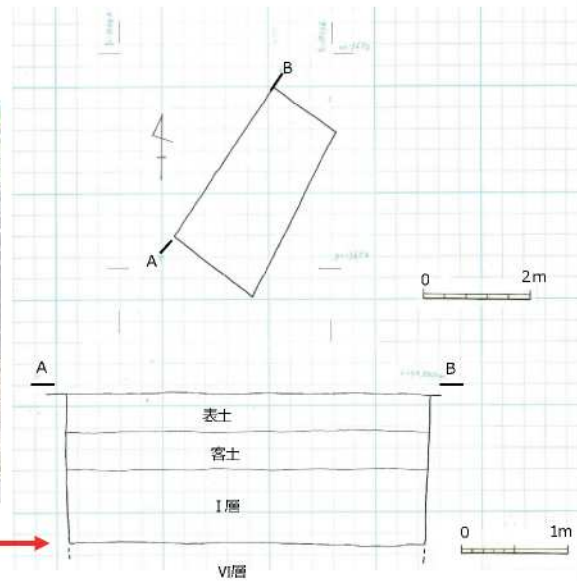


R 2 A 調査区



東から

旧河川の中と考えられる。

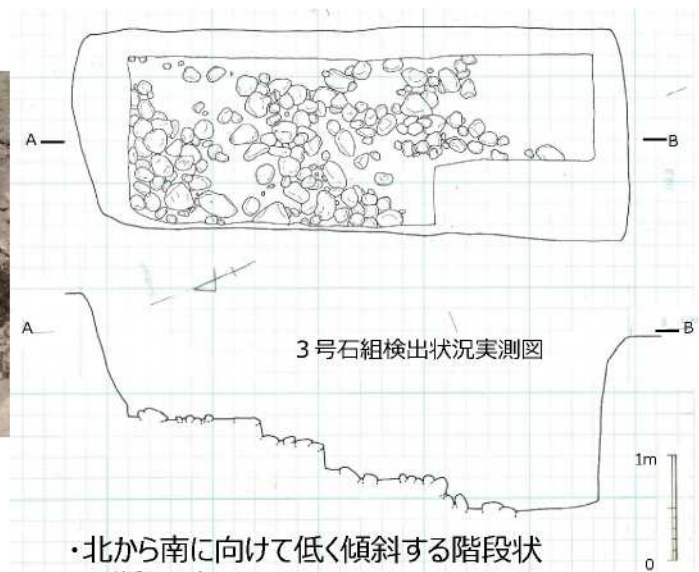


R 2 B 調査区 3号石組検出時

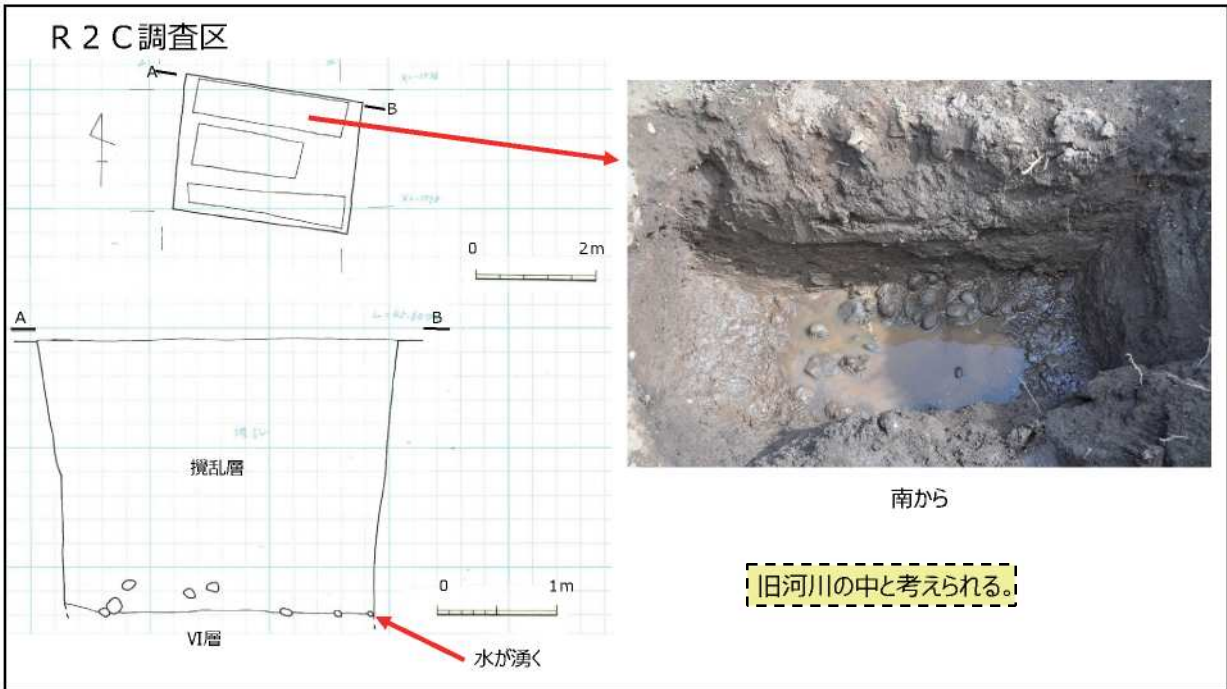
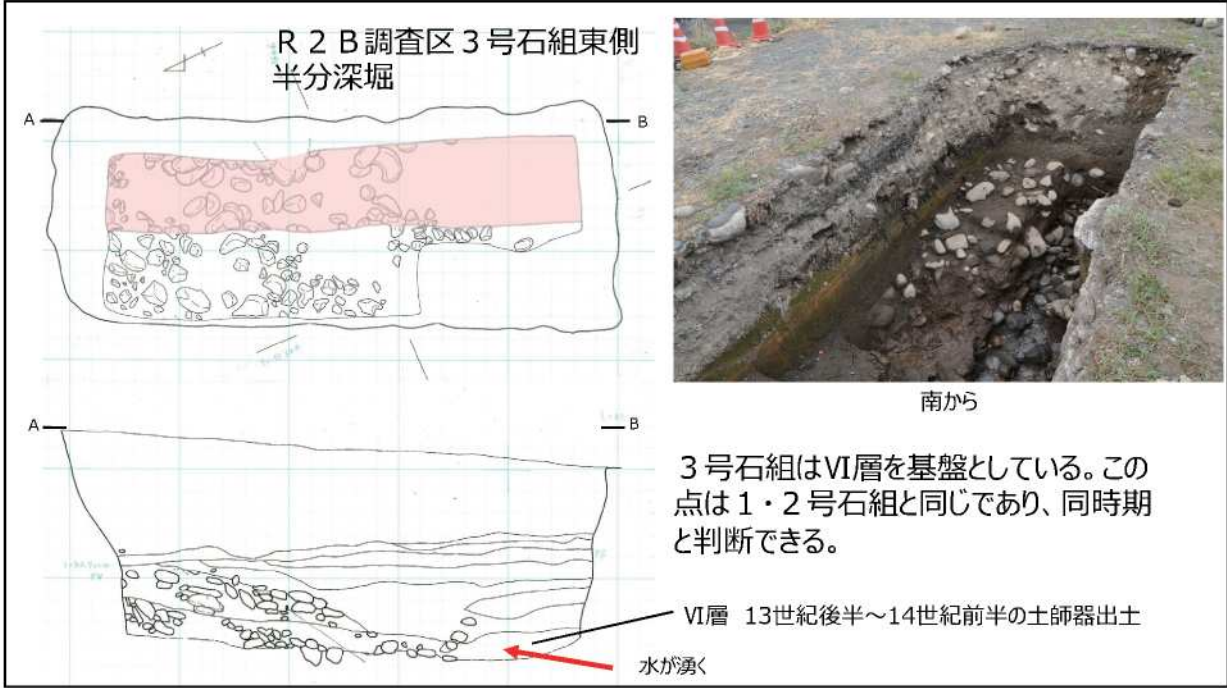


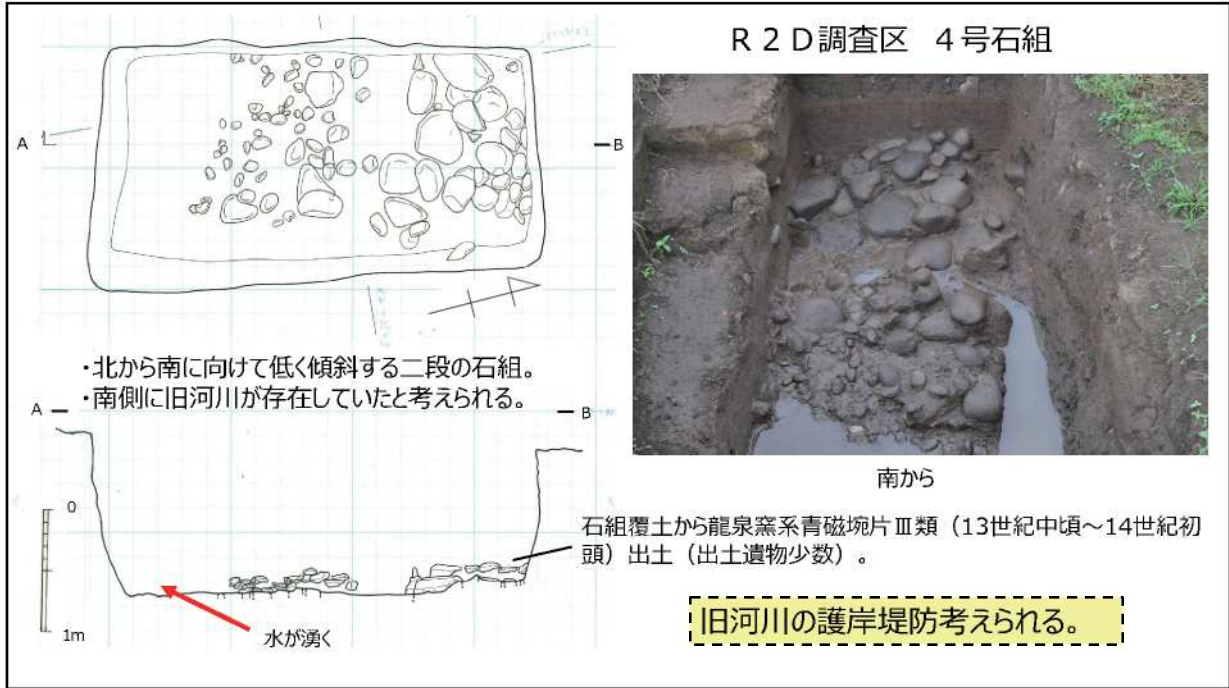
北東から
最深部では水が湧く。

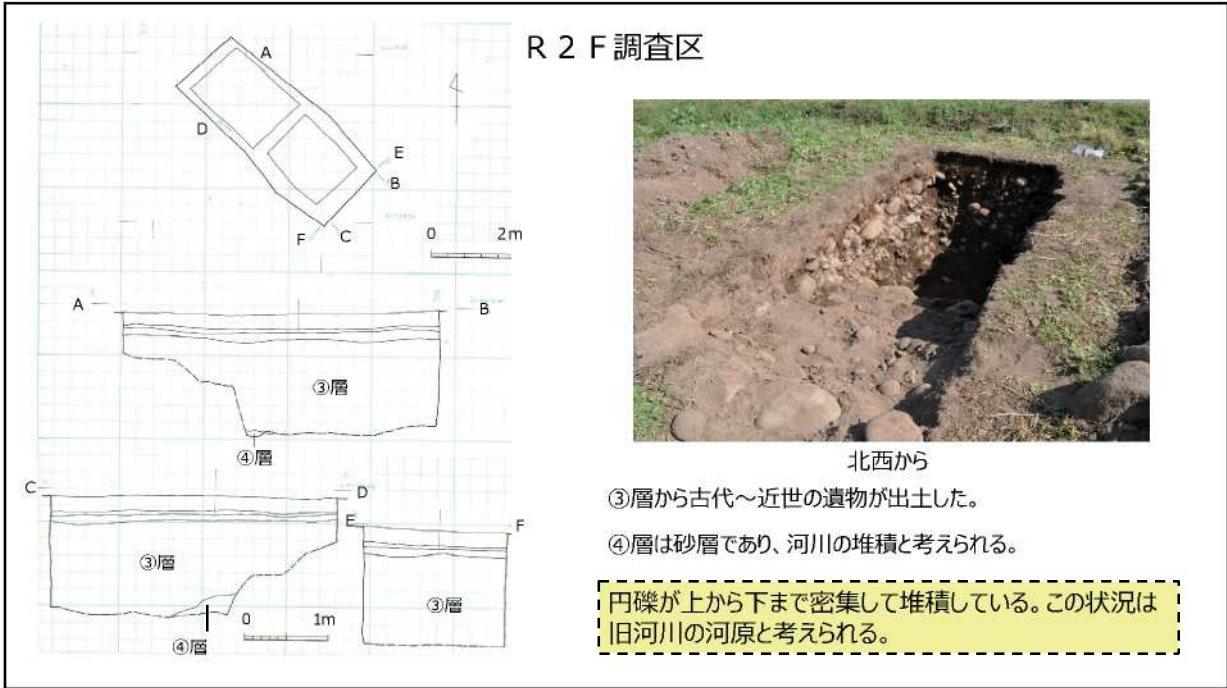
旧河川の護岸堤防考えられる。

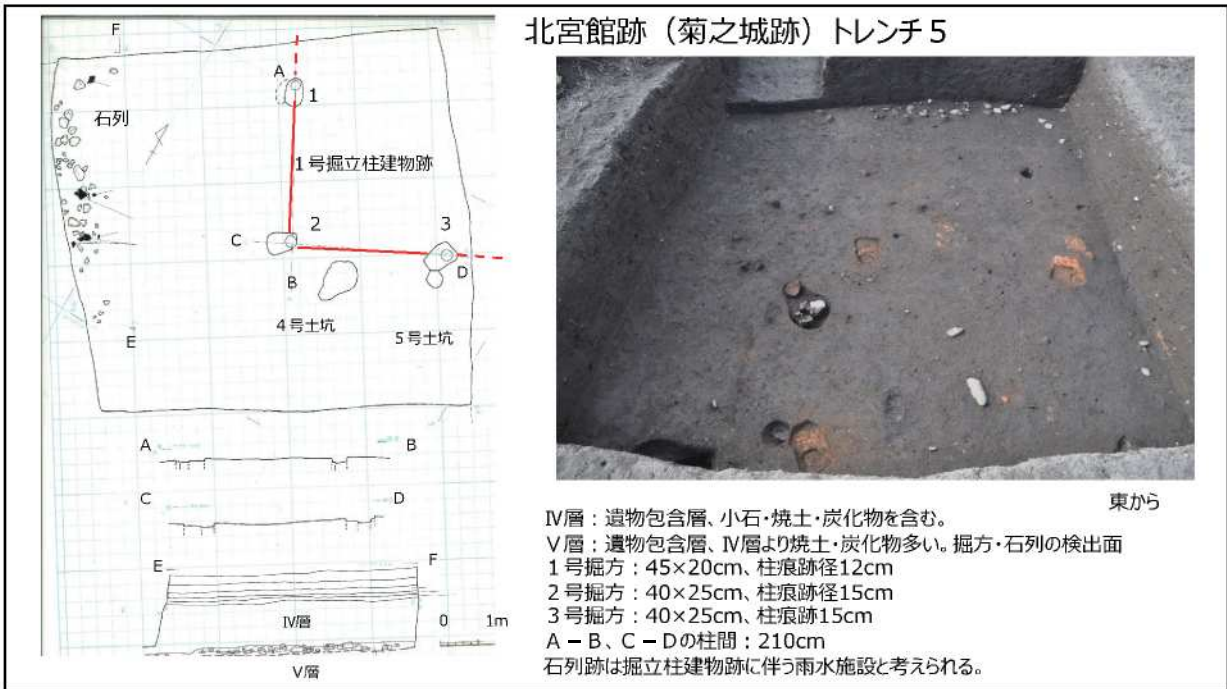


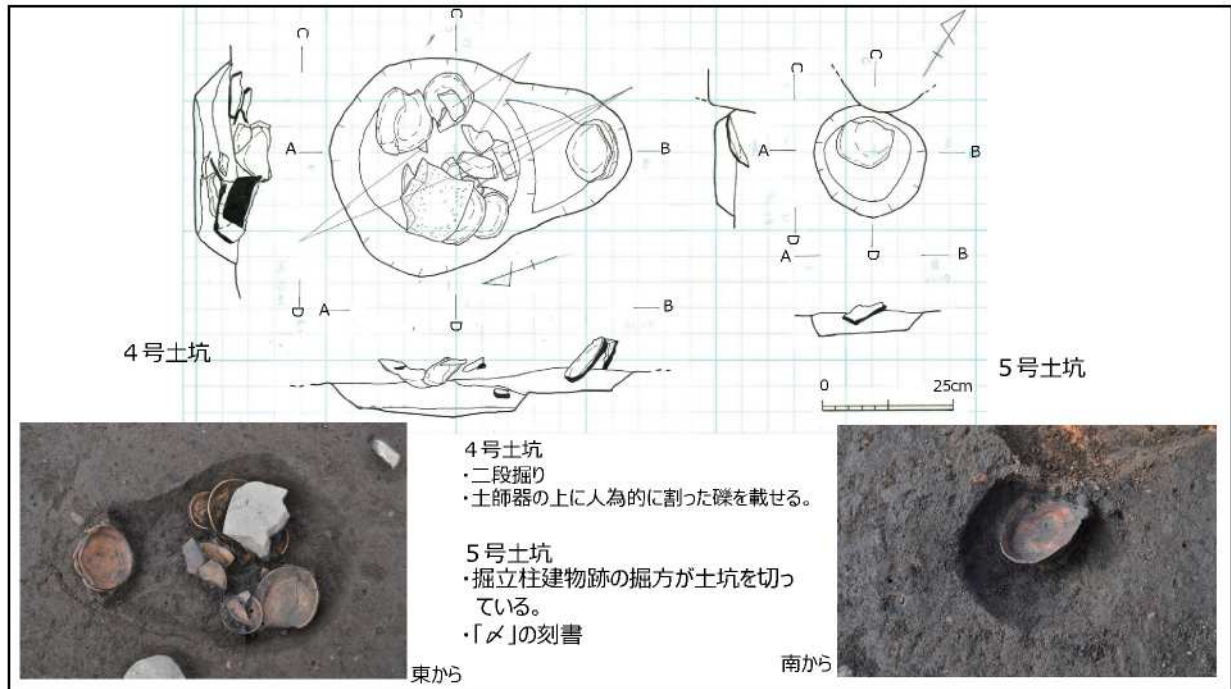
- ・北から南に向けて低く傾斜する階段状の断面形になる。
- ・南側に旧河川が存在していたと考えられる。











北宮館跡（菊之城跡）調査区出土の威信財としての陶磁器



トレンチ 5 出土 断面方形の口縁部



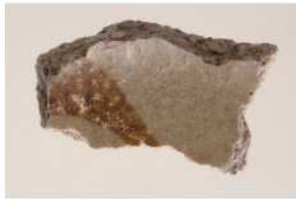
トレンチ 2 出土 断面方形の口縁部



トレンチ 5 出土 胴部 外面下半露胎



トレンチ 1 出土 胴部
外面下半露胎 内面鉄絵



トレンチ 2 出土 底部
底部・体部外面露胎 見込みに鉄絵

・口縁部形態から福建省磁灶窯系陶器盤 I-2b 類 (11世紀後半～12世紀前半) と考えられる。
・他 3 点も盤の可能性はある。

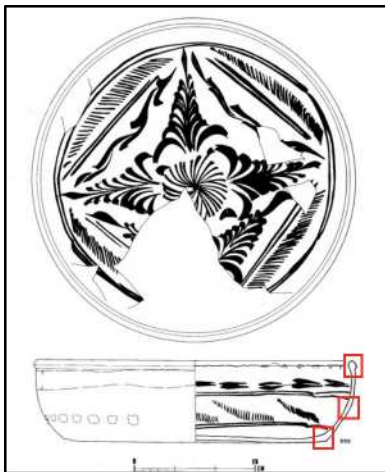


トレンチ 4 出土口縁部 内外面に禾目がある
天目茶碗 森本分類Ⅲ類 (12世紀前半～後半) 口縁部直下外面に浅い窪みがある



トレンチ 2 出土口縁部 ピロー・スクタイプ白磁碗Ⅱ類 (13世紀末～14世紀前半) 外面にロクロ痕が稜線状に残る

北宮館跡（菊之城跡）から出土した部位



磁灶窯系陶器盤

「博多Ⅱ」福岡市文化財調査報告第86集 1982を一部加工して作成



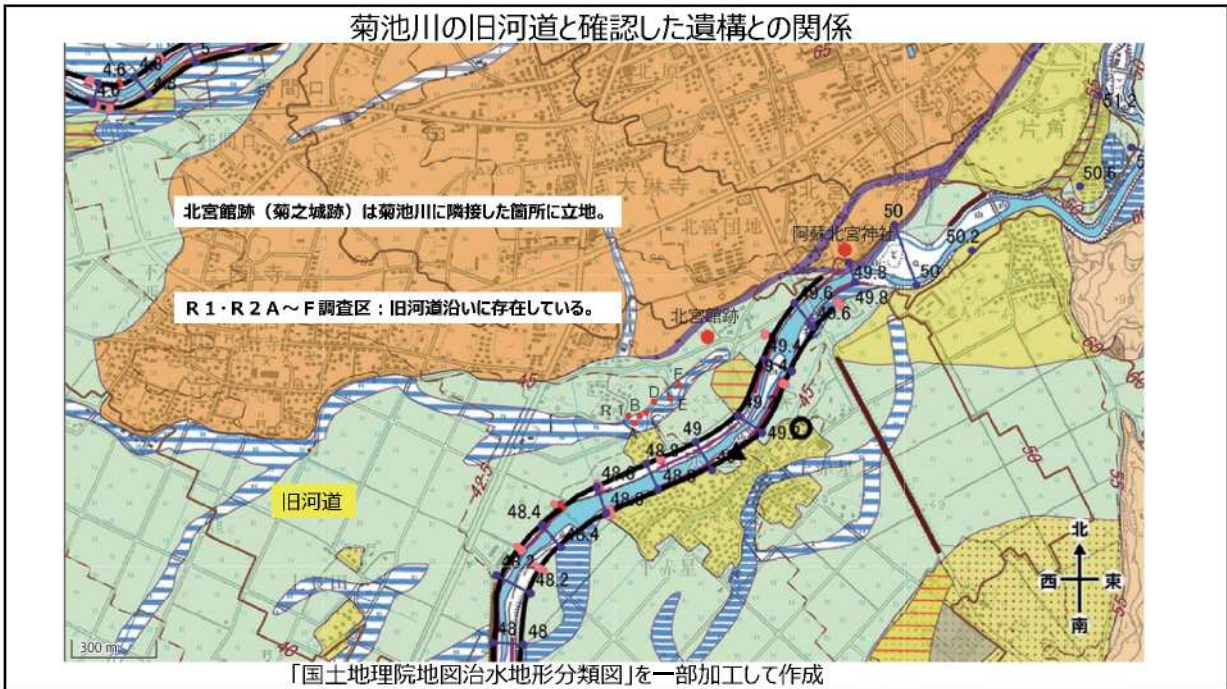
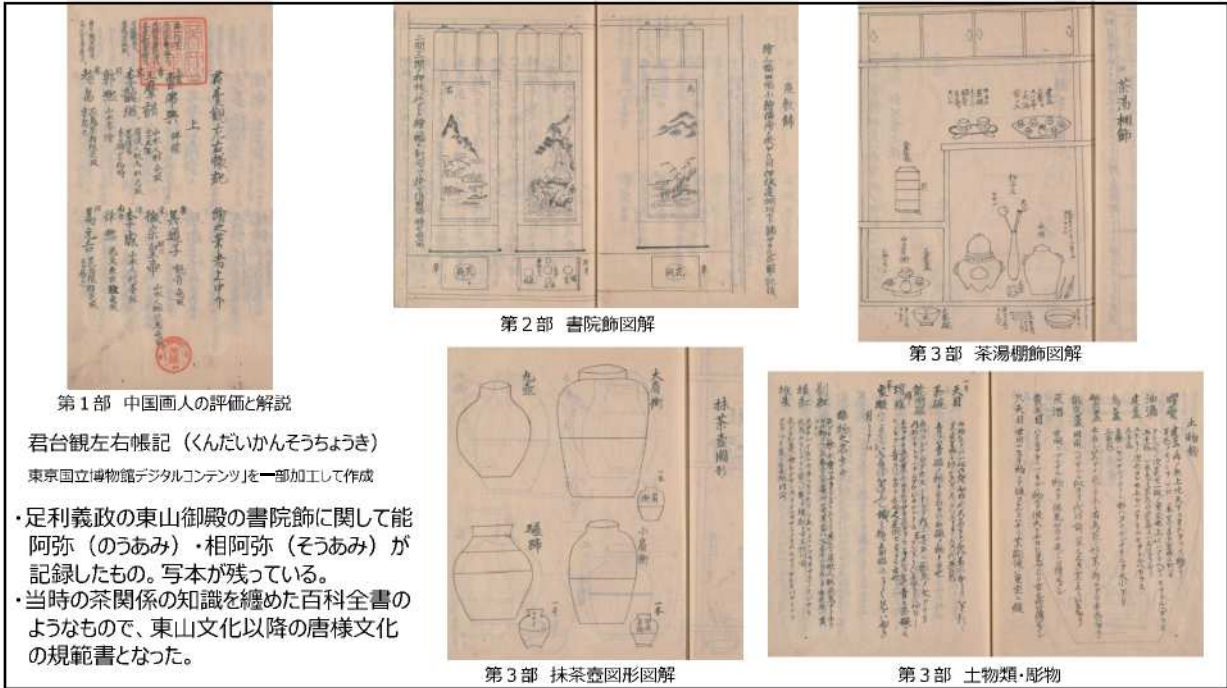
禾目天目

「東京国立博物館デジタルコンテンツ」を一部加工して作成



大分市南蛮 B V G O 交流館立体展示・茶室

大友宗麟が茶の湯の達人であったことに因んで戦国時代の茶室を復元している。お茶道具の一部は発掘調査の出土遺物。





当時の様子を『一遍上人絵伝』から推定

一遍が亡くなったのが1289年、10年後（1299年）の命日に絵巻が完成した。

巻四 筑前国の武士の館に一遍が訪れる

- ・館では酒宴の最中。
- ・館は堀と塀で方形に区画されている。

北宮館跡（菊之城跡）の参考事例



巻四 福岡の市

- ・吉井川沿いに市が開催されている。
- ・舟着場に二艘の船が泊っている。

- ・当時の川舟の事例
- ・北宮館跡（菊之城跡）周辺にこのような市開催の可能性（「上市場」「下市場」の小字名の存在）

『一遍上人絵伝』「国立国会図書館デジタルコレクション」を一部加工して作成

まとめ

肥後北部の中世豪族形成期
（12世紀～14世紀初頭）

北宮館跡（菊之城跡）周辺

肥後守護として領国制を整えた確立期
（14世紀中～16世紀初）

隈府に拠点を移す

今回の確認調査で一部が明らかになった

調査成果	調査成果から考えたこと
R 1 調査区：1・2号石組	旧河川舟着場跡
B 調査区：3号石組	旧河川護岸
D 調査区：4号石組	旧河川護岸
E 調査区：5号石組と掘り込み	池状遺構
A・C・F 調査区	旧河川

- 各調査区は治水地形分類図の「旧河道」に沿った場所にある。
- 確認した遺構・河川は旧河道に伴う。

- 北宮館跡（菊之城跡）はこの旧河道に面した場所にあり、水運に適した立地であった。
- 北宮館跡（菊之城跡）は希少な陶磁器出土から菊池氏の領主館と位置づけられる。
- 菊池氏は水運利用の経済活動を可能にするため、旧菊池川の施設整備を行ったと考えられる。

R 1 調査区検出遺構平面実測図

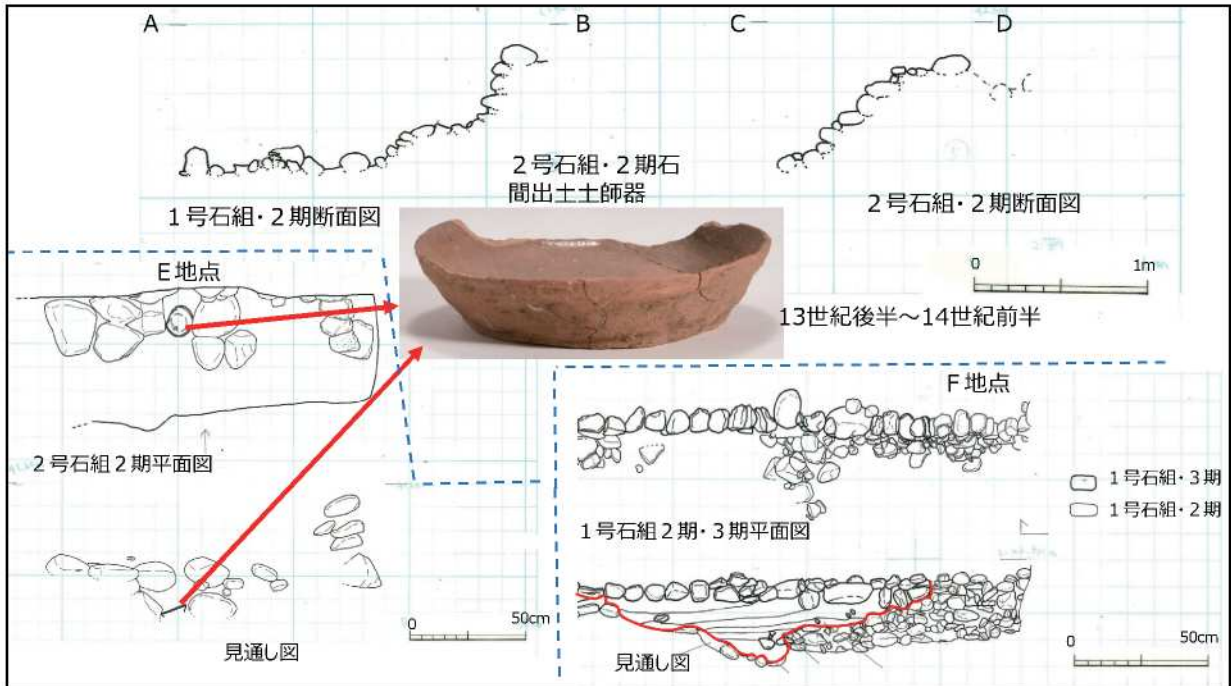
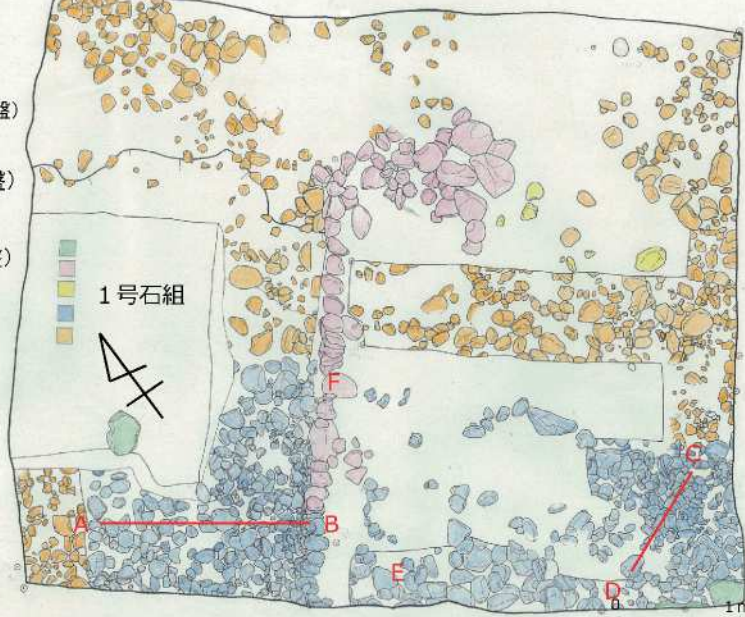
土層略図

砂①②	3期 (砂①・砂②層基盤) 部分的な修復
V層	2期(V層基盤)
VI層	1期(VI層基盤)

石組は壁だけではなく、底面も石を敷き詰めている。



石組の大きさから、小舟の舟着場と考えられる。

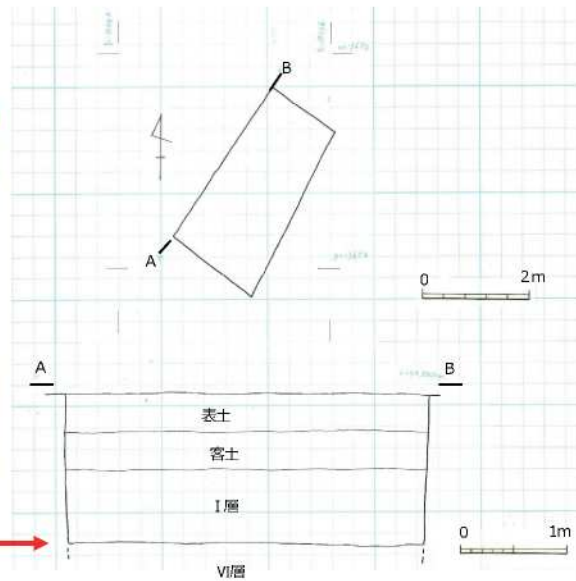


R 2 A 調査区



東から

旧河川の中と考えられる。

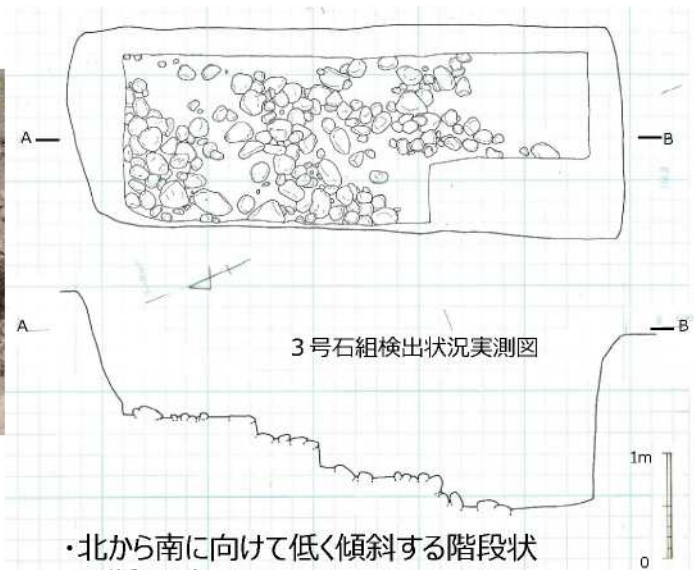


R 2 B 調査区 3号石組検出時

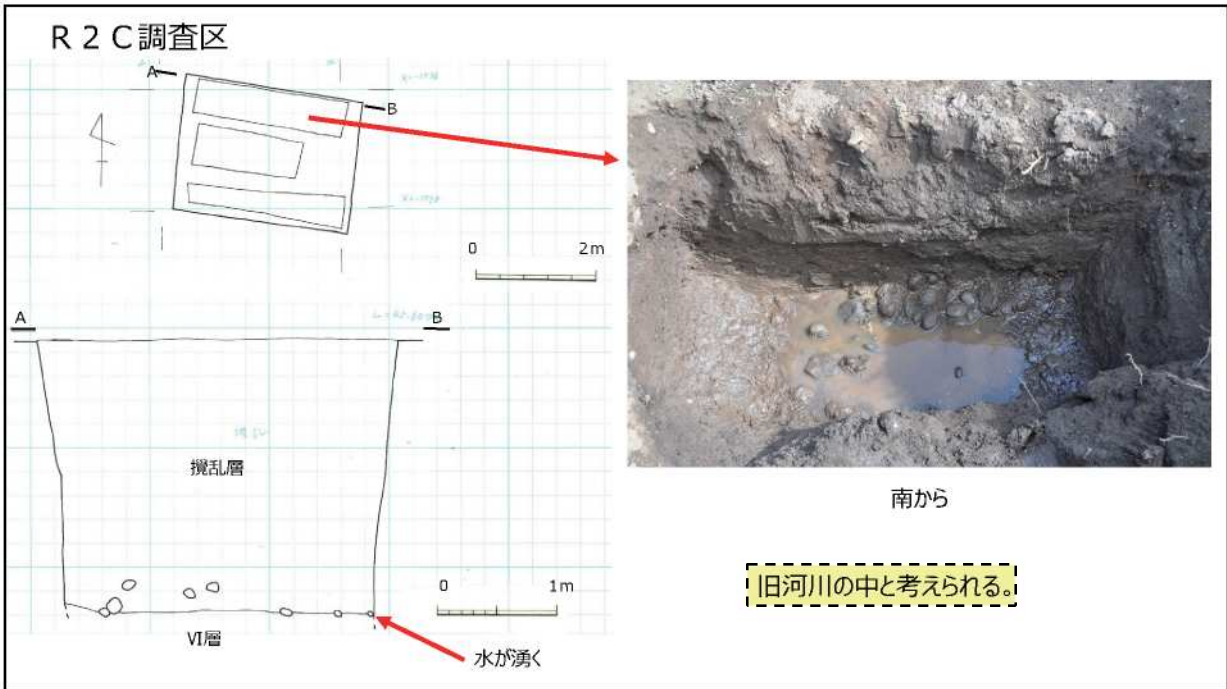
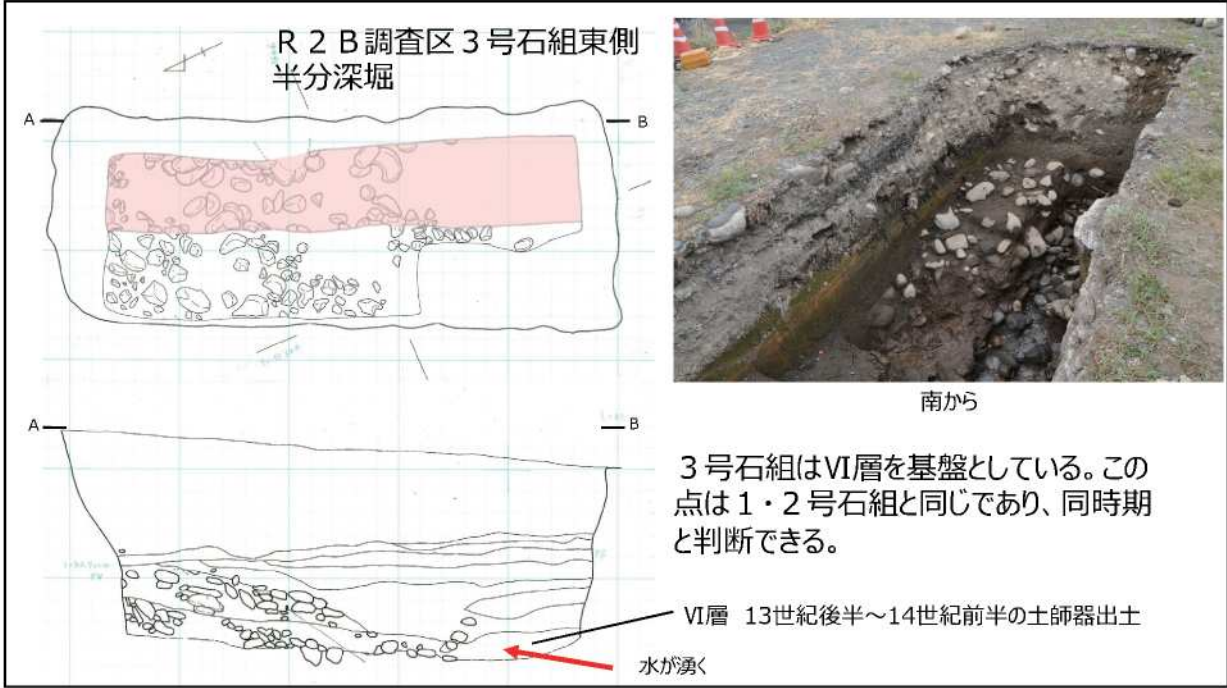


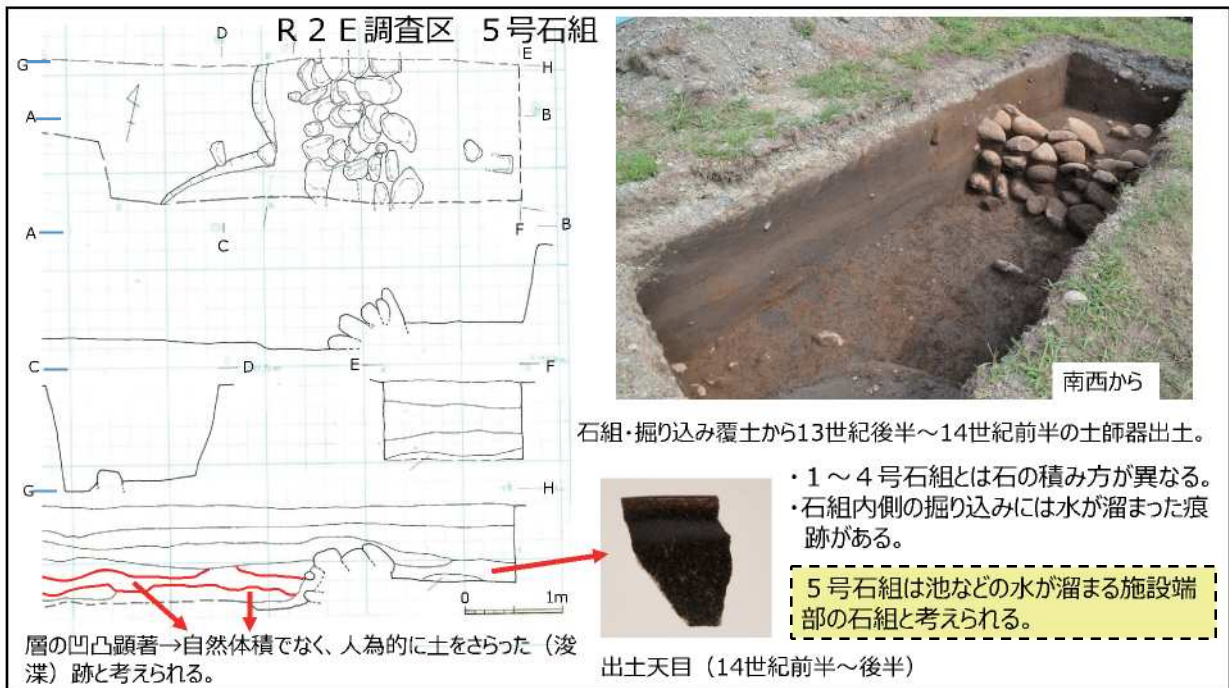
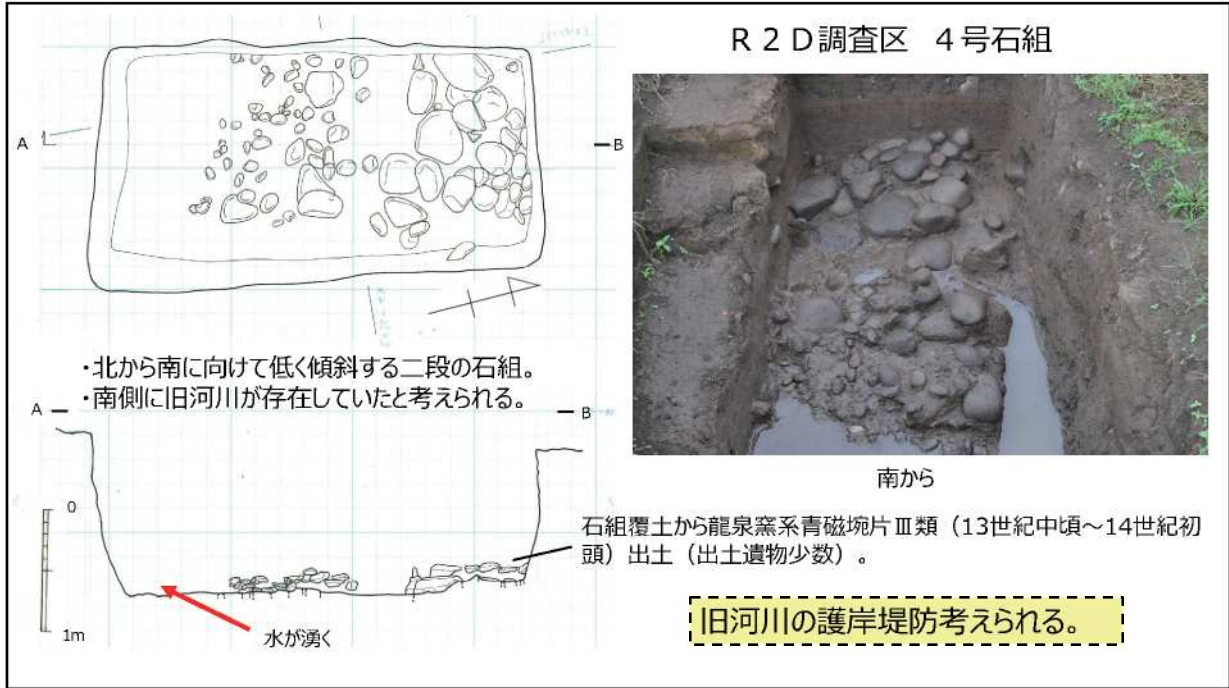
北東から
最深部では水が湧く。

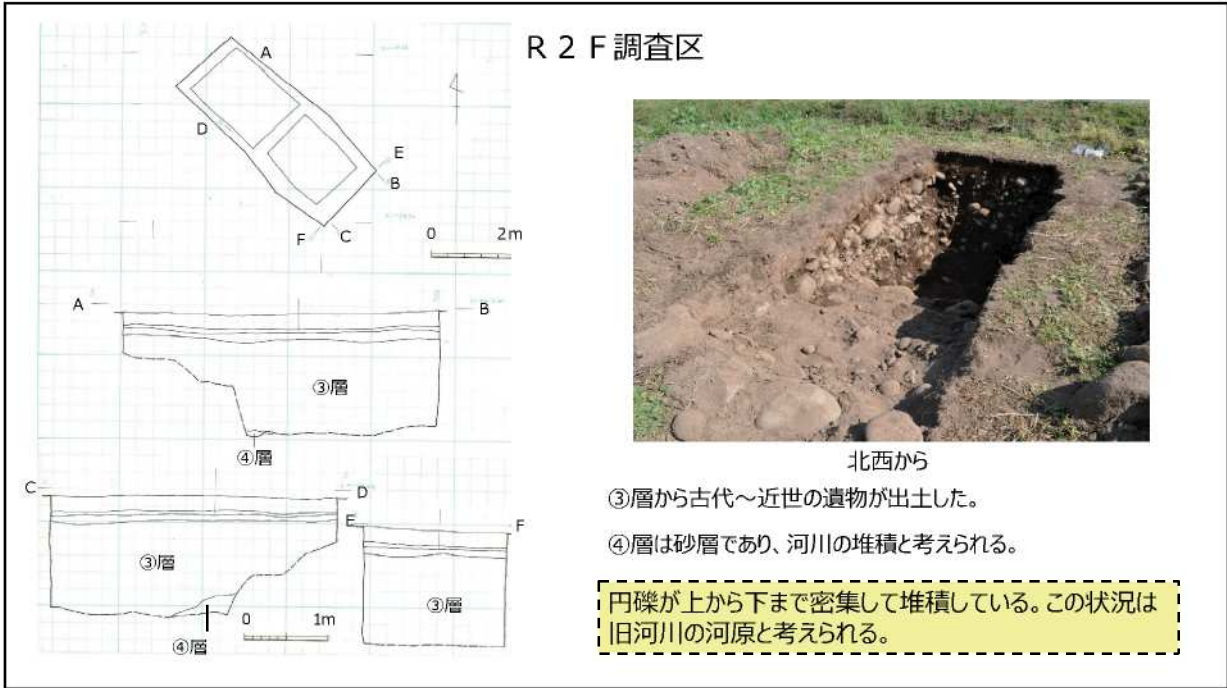
旧河川の護岸堤防考えられる。

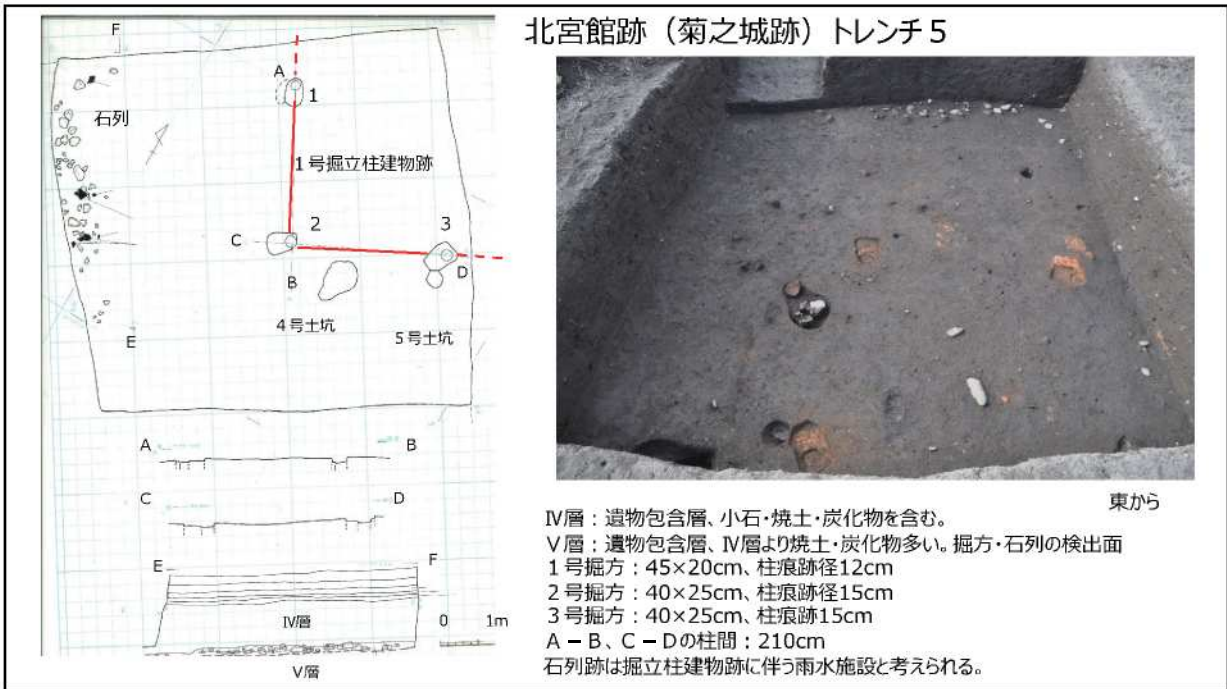


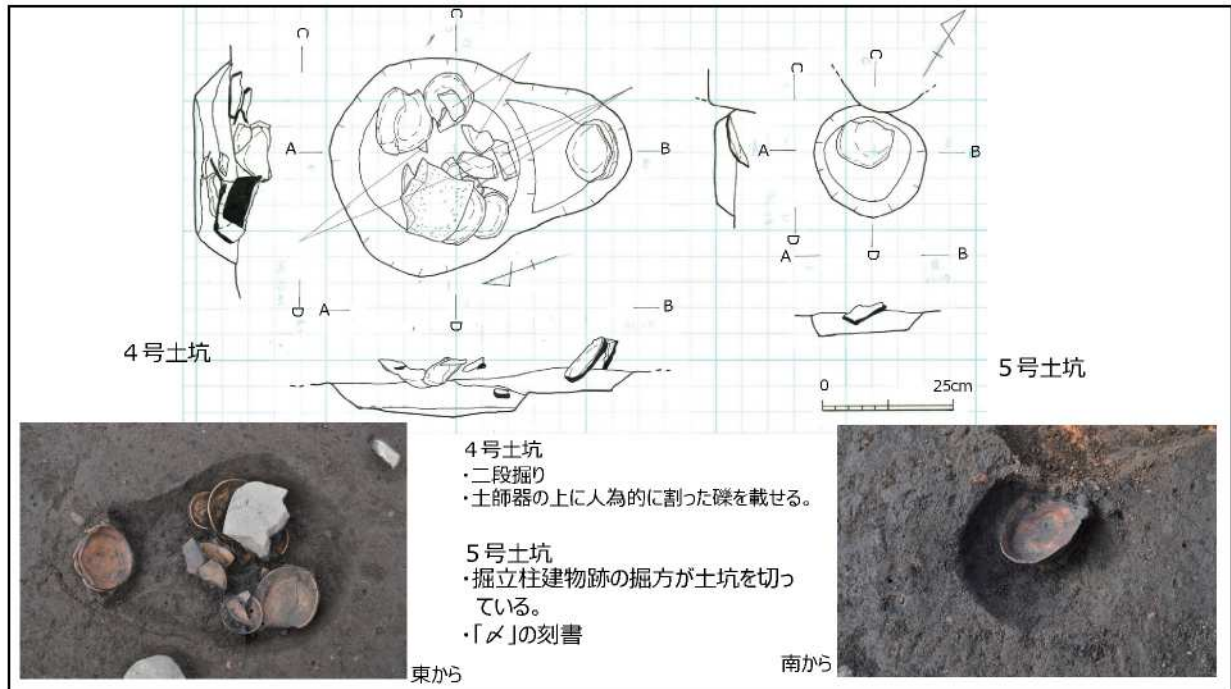
- ・北から南に向けて低く傾斜する階段状の断面形になる。
- ・南側に旧河川が存在していたと考えられる。











北宮館跡（菊之城跡）調査区出土の威信財としての陶磁器



トレンチ 5 出土 断面方形の口縁部



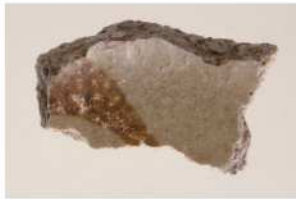
トレンチ 2 出土 断面方形の口縁部



トレンチ 5 出土 胴部 外面下半露胎



トレンチ 1 出土 胴部
外面下半露胎 内面鉄絵



トレンチ 2 出土 底部
底部・体部外面露胎 見込みに鉄絵

・口縁部形態から福建省磁灶窯系陶器盤 I-2b 類 (11世紀後半～12世紀前半) と考えられる。
・他 3 点も盤の可能性はある。

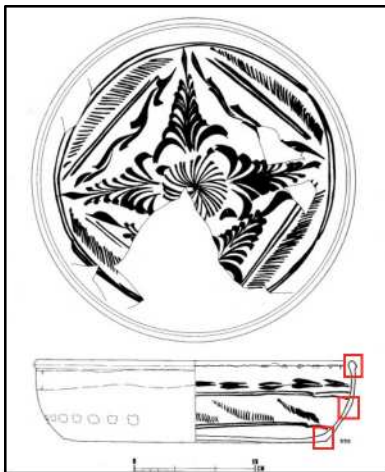


トレンチ 4 出土口縁部 内外面に禾目がある
天目茶碗 森本分類Ⅲ類 (12世紀前半～後半) 口縁部直下外面に浅い窪みがある



トレンチ 2 出土口縁部 ピロー・スクタイプ白磁碗Ⅱ類 (13世紀末～14世紀前半) 外面にロクロ痕が稜線状に残る

北宮館跡（菊之城跡）から出土した部位



磁灶窯系陶器盤

「博多Ⅱ」福岡市文化財調査報告第86集 1982を一部加工して作成



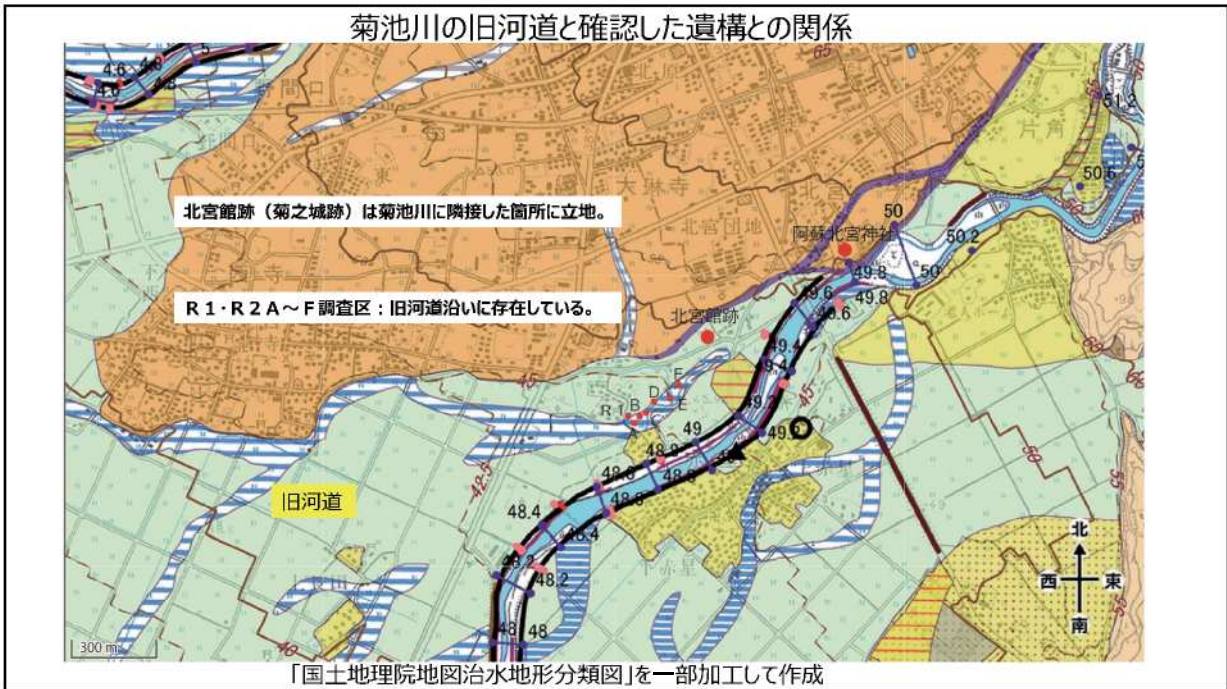
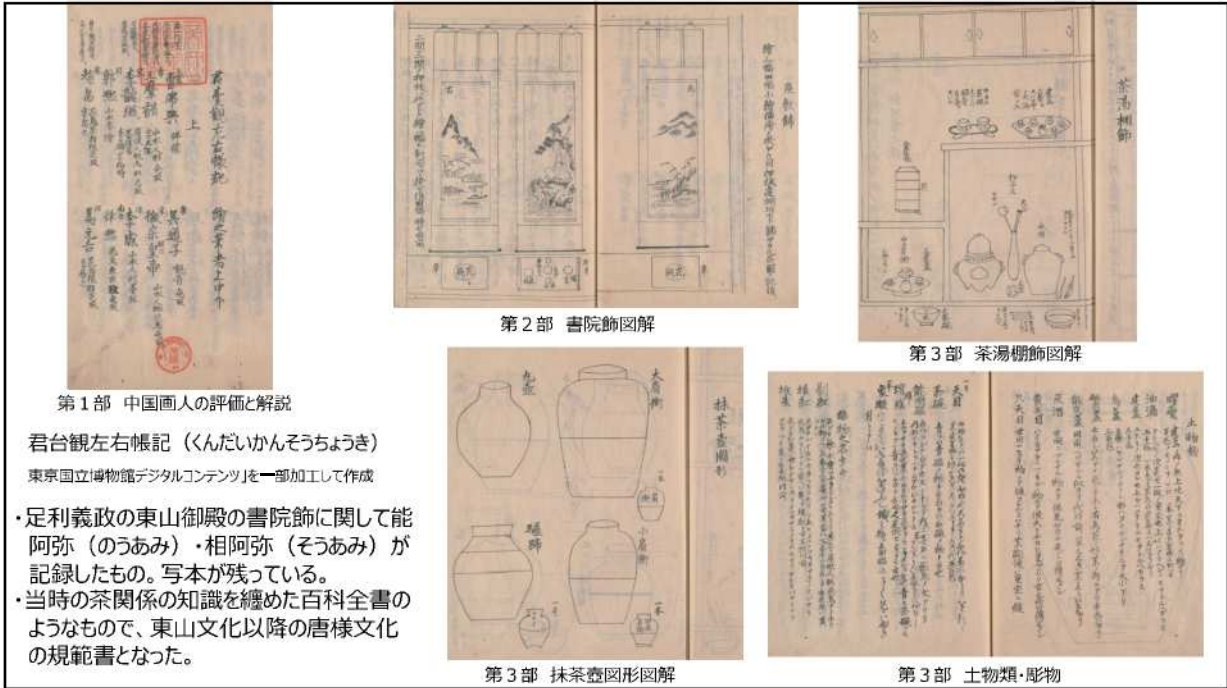
禾目天目

「東京国立博物館デジタルコンテンツ」を一部加工して作成



大分市南蛮 B V G O 交流館立体展示・茶室

大友宗麟が茶の湯の達人であったことに因んで戦国時代の茶室を復元している。お茶道具の一部は発掘調査の出土遺物。





当時の様子を『一遍上人絵伝』から推定

一遍が亡くなったのが1289年、10年後（1299年）の命日に絵巻が完成した。

巻四 筑前国の武士の館に一遍が訪れる

- ・館では酒宴の最中。
- ・館は堀と塀で方形に区画されている。

北宮館跡（菊之城跡）の参考事例



巻四 福岡の市

- ・吉井川沿いに市が開催されている。
- ・舟着場に二艘の船が泊っている。

- ・当時の川舟の事例
- ・北宮館跡（菊之城跡）周辺にこのような市開催の可能性（「上市場」「下市場」の小字名の存在）

『一遍上人絵伝』「国立国会図書館デジタルコレクション」を一部加工して作成

まとめ

肥後北部の中世豪族形成期
（12世紀～14世紀初頭）

北宮館跡（菊之城跡）周辺

肥後守護として領国制を整えた確立期
（14世紀中～16世紀初）

隈府に拠点を移す

今回の確認調査で一部が明らかになった

調査成果	調査成果から考えたこと
R 1 調査区：1・2号石組	旧河川舟着場跡
B 調査区：3号石組	旧河川護岸
D 調査区：4号石組	旧河川護岸
E 調査区：5号石組と掘り込み	池状遺構
A・C・F 調査区	旧河川

- 各調査区は治水地形分類図の「旧河道」に沿った場所にある。
- 確認した遺構・河川は旧河道に伴う。

- 北宮館跡（菊之城跡）はこの旧河道に面した場所にあり、水運に適した立地であった。
- 北宮館跡（菊之城跡）は希少な陶磁器出土から菊池氏の領主館と位置づけられる。
- 菊池氏は水運利用の経済活動を可能にするため、旧菊池川の施設整備を行ったと考えられる。

中世菊池氏の歴史的位置

令和3年度 肥後古代の森協議会 菊之城跡周辺の確認調査成果報告講演会
今、目覚める！ 菊池本城の記憶
2022年3月13日 於泗水公民館大研修室
熊本大学 稲葉 継陽

はじめに

近年の菊池一族研究の深化

- ▼熊本県立美術館図録『日本遺産認定記念 菊池川二千年の歴史 菊池一族の戦いと信仰』2019年
- ▼菊池市文化研究所の設置（2018年）と「菊池一族調査研究事業」の展開
→菊池市教育委員会・菊池文化研究所『菊池一族解体新章』の刊行（既刊2巻）

➔これらの事業の成果をもとに中世菊池氏の概要を解説

I 菊池氏のルーツ

I-1 平安時代後末期の九州

○宇佐八幡宮の勢力

- 豊前・豊後（福岡県東部、大分県）から日向・大隅（宮崎県、鹿児島県東部）へと拡大

○近衛家（摂関家）領島津荘

- 薩摩・大隅・日向南部（鹿児島県、宮崎県南部）を覆う

○大宰府の支配

- 筑前・筑後・肥前・肥後（福岡県東部・南部、長崎県、熊本県）に進出
➔現地の有力者を「府官」として編成、彼らは主要河川沿いに勢力を扶植

I-2 菊池則隆・政隆の登場



I-2 菊池則隆・政隆の登場

○菊池氏の勢力形成

1040年、藤原（菊池）則隆の子息正隆が租税の運上使として肥後から上洛、肥後の前国司を殺害

- ➔二人は大宰権帥藤原隆家の従者である有力府官にして肥後国衙の在庁官人
- 大宰府に赴任した藤原氏の一族が菊池郡の在来豪族と結合・定着したものと考えられている

I-3 大宰府 = 安楽寺と共同の地域開発



小川弘和『中世的九州の形成』（高志書院、2016年）28頁

図2 肥後国の荘園制

I-3 大宰府 = 安楽寺と共同の地域開発

○菊池川河口の大宰府 = 安楽寺領玉名荘が成立、府官系武士・菊池氏がこれに関与したと考えられる

➡有明海上交通と内陸部とを接続

○肥後北部には安楽寺領が集中→菊池川の河川交通を媒介とした地域開発

➡安楽寺と菊池氏が領主権を共有する所領形成が進展

I-4 院政期（12世紀）の社会動向と菊池氏の勢力進展



I-4 院政期（12世紀）の社会動向と菊池氏の勢力進展

○院政期には菊池氏が広大な王家領荘園の立荘を支えて国衙での地位も安定させ、**菊池・山鹿・玉名郡**を勢力下におさめる

○12世紀後期の**菊池隆直**の頃には**合志太郎**らの一族や、**阿蘇郡**の南郷大宮司惟安、**益城郡**の木原盛実ら有力武家を率いて平家方と戦う肥後国衙最大の勢力（**権守**）に

II 鎌倉幕府と菊池氏

II-1 蒙古襲来絵詞に描かれる菊池氏



II-1 蒙古襲来絵詞に描かれる菊池氏

「蒙古襲来絵詞」

モンゴル襲来後に竹崎季長によって益城郡甲佐大明神に奉納

➔「人々多しといえども、**菊池の二郎たけふさ**、文永の合戦に名をあげし」

○絵詞の名場面に名のみえる菊池一族

赤星太郎 菊池三郎有高 菊池三郎武房

○竹崎季長は自分の戦功の証人として菊池武房を頼み、恩賞を得る

➔国内御家人を統率し恩賞申請に深く関わる菊池武房、**その地位は幕府体制下でも不動**

II-2 文永10年（1273）閏5月 菊池武房書状

武房曰く「北条政村殿が亡くなったとのこと、驚いています。弔問に参上したいのですが、モンゴル軍との戦いのため動けません。代理の者を遣わします」

→北条氏との深い関係を維持し、肥後国第一の御家人たる地位を維持



菊池武房

在官様大御所御前之由紙

及御味は御察入之旨 念上可

中入様及 依三三三様 御所御前

御察入之旨 念上可 仰付

及之旨 依三三三様 御所御前

御察入之旨 念上可 仰付

及之旨 依三三三様 御所御前

以上 本所御所御前

蓮左文庫所蔵文書

蓮左文庫所蔵文書

III-3 鎌倉末期、玉名郡に強い勢力を保持

○嘉暦4年（1328）3月 鎮西御教書（深江家文書）

鎮西探題、玉名郡大野別府の係争物件（領地）を勝訴者に引き渡すよう菊池武時（菊池次郎入道）に指示

→菊池武時、菊池川河口部の秩序維持を担う存在



鎌倉時代末期まで、北条氏に宛てていた菊池武時

北条氏に宛てていた菊池武時

鎌倉時代末期

鎌倉時代末期

鎌倉時代末期

鎌倉時代末期

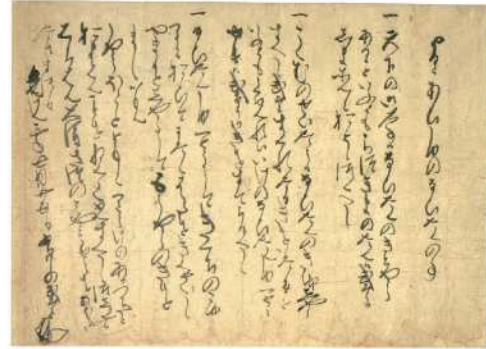
鎌倉時代末期

鎌倉時代末期

鎌倉時代末期

IV 14世紀の動乱と菊池氏

IV-1 動乱初期の菊池氏



よりあひしゆのなひたんの事

「天下の御夫妻へなひたんの事をやう
ありといふと、らつとよのたんにハ、武重か
しよとんにおとしくへし、

「ごくのせむたうへなひたんの事をしやう
すへし、武重すもたもをいいたすと
いふとくわんれいけのなひたんにしゆ」とう
せすハ、武重をよすてらるへし、

「なひたんの事」とうして、さくちのこを
りにおひて、かくはたきんせし、
やまをしやうして、もしやうのきを
まし、かもん

しやうはうととも二りうけのあつさー
およはんことをわんくわんすへし、つしんで
はちはんたはさつ、のやうすをばはさ
たてよつる、

えんげんを七と五日、よちいらの武重(元暦)

菊池一族の今後をうれて
制定された家法

56 菊池武重起請文

国史文庫院蔵

一編

一編

これからの武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事
武重(元暦)の事

IV-1 動乱初期の菊池氏

○菊池武時、北条氏と深い関係をもつが故に倒幕のさきがけに
→大友・少弐氏らとともに伯耆の後醍醐天皇と早期に連絡を
とって鎮西探題を襲うが敗死

→武重(宮方肥後守) →武士

○動乱の展開の中で、菊池一族集団と当主との対立が深刻化

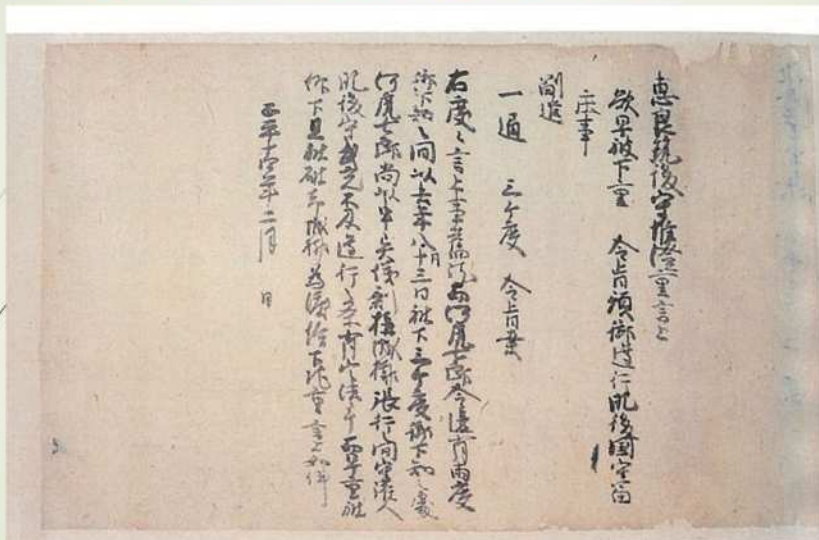
→宮方・武家方の選択は**武重**に、国務内政は**一族合議**に(菊池武重起請文)

→**一族傍流から菊池武光が登場、宮方として方針一定すること**
で一族を糾合

IV-2 菊池武光と征西府

- ▶ 1348年 征西將軍宮懷良、薩摩から肥後に入り菊池武光に迎えられる = 「菊池征西府」
- ▶ 1361年 筑後川合戦の勝利をうけて征西府が大宰府に入る = 「大宰府征西府」
- ▶ 1372年 九州探題今川了俊の攻勢で征西府は筑後の高良山に移る = 「高良山征西府」
- ▶ 1373年 菊池武光死去

IV-3 肥後国宮方守護職菊池武光



117 第9卷 - 5 惠良惟澄重申状 刊本 155号

IV-3 肥後国宮方守護職菊池武光

- 国内武士に対する**軍事統率**と**所領引渡**について権限を行使
- みずからの軍事行動は阿蘇氏における宮方勢力たる**恵良惟澄**とともに、**征西府に結集した肥後の在来武士団の中核的存在**として全盛期を現出

IV-4 征西府末期における菊池武朝

- 1374年 征西府肥後へ撤退→菊池から宇土、そして八代高田へ
 - 1392年以前に菊池武朝を含む肥後の多くの宮方武士が今川了俊に降伏して**本領を安堵**される。
- 武朝は征西府宇土・八代時代に肥後最南部球磨郡の相良氏、葦北・天草の諸領主、宇土との関係を深める
 - 室町期肥後の政治秩序**へつながる
- 阿蘇氏**とは血縁関係を深めて一体の関係を維持（武朝の母は阿蘇氏）
- 応永2年（1395）の混乱期には「高瀬御陣」で**菊池川河口**を確保、**筑後の武士**をも動員
 - これ以後、応永14年（1407）の死去まで、肥後・筑後の領主に対する本領安堵や所領給付、阿蘇神社修理費用の一国課税を行うなど、**肥後国の実質的な守護権力**となる

V 室町期肥後国守護菊池氏

V-1 守護職を相伝

○歴代肥後国守護

兼朝—持朝—為邦—重朝—能運—政隆—武包—義武

○さらに永享4年（1432）から寛正6年（1485）までは
筑後国守護職を得て大友氏と拮抗

➔南筑後の領主たち（五條氏、三池氏、溝口氏、河崎氏、蒲池氏、西牟田氏）らに筑後・肥後で知行を宛行い組織化

V-2 室町期菊池氏の領域支配の構成

(1) 隈府（菊池）を中核にして南は肥後国北西部（菊池・山鹿・玉名・山本・合志・飽田郡）から北は筑後国南部にまで広がる直接支配領域

→一族及び古くからの家臣筋の領主たちが割拠、所領を宛行い、保証して軍事動員

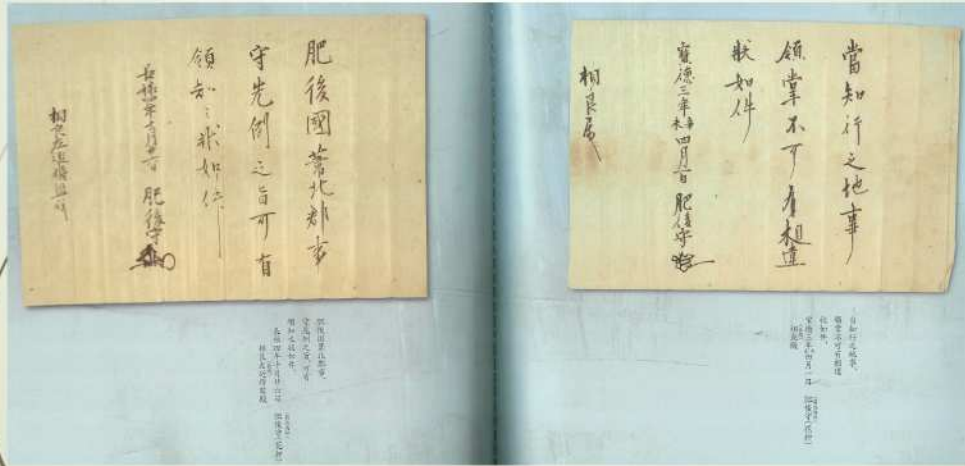
➔二国にまたがる極めて個性的な領域権力

(2) 肥後国阿蘇郡及び南部の国人衆（阿蘇氏や相良氏など郡単位の領域支配を実現している領主）に対する守護権限の行使

➔郡単位の領域支配を保障／紛争調停／一国祭祀権／一国課税権

V-3 肥後国における分郡安堵

成り上がり者の戦国相良氏は球磨郡、葦北郡、八代郡の安堵＝保障を菊池氏から文書で受けることで、領域支配の正統性を示さねばならなかった



V-4 一国祭祀・課税権

文明4年（1472）菊池重朝による阿蘇山上の上宮と麓の阿蘇社本堂の修造のための一国棟別銭賦課



※229 第24巻 - 5 相良為統書状 刊本 282号

V-5 国人領主どうしの紛争を裁定

文明16年(1484)4月、菊池重朝は相良為続の名和顯忠攻撃を停止させ、八代郡(相良)と宇土郡(名和)の境目を確定させるために、天草の上津浦上総介に仲裁を依頼(相良家文書)

→紛争当事者と近隣勢力を超越した守護としての菊池氏だからこそ可能な役割

二三三 菊池重朝書状
 先度御筆候御被見候哉抑慮外之世上無世非次第候依八代事爲頼他家へ被申候儀尤候雖然八代本主盛出之上者時節到來候間於今者爲當家同心永無爲知行候者爲自他可然候處如今者可矣不可絶候此趣可有故買之由上津浦上総介へ申候定彼方より可有意見候早々事可然様ニ被取成候者候誓可申候於其遠逗留之由承候間如此申候邊入候恐々謹言
 (文明十六年) 四月廿五日
 税所式部少輔殿
 (菊池) 重朝(花押)

V-6 菊池氏の落日

戦国初期、大友氏との関係をめぐって直接支配領域の家臣団が分裂し(俯瞰的にみれば家臣たちの領主的自立)、実質的に最後の当主となった菊池義武(大友義鑑弟)は1520年に隈府を去って隈本を本拠に→肥後の中世から近世への一大画期

當家之事若ら一味
 同心より陳日月朔
 若府に任代義並
 侍忠告る感候
 々々々々々々
 爲光

七六 宇土爲光書状
 當家之事、老若一味同心申候之條、今月朔意辨候、任代々義、益御忠節可感候哉、恐々謹言、
 六月十三日
 五條殿
 爲光(花押)

写真4-3 宇土爲光書状

VI 菊池氏の歴史的位置

(1)地付きの開発領主（大宰府官）武士団から出発し、11世紀から16世紀初期まで一貫して一国内武士団のトップの座を維持した稀有な存在

➡戦国時代に菊池を退いた後も相良氏のもとにあって肥後や北部九州の諸領主の行動に正統性を付与（唯一無二の菊池ブランド）

(2)東国から下向した勢力以外でその国の守護となった者は、九州では菊池氏をおいてほかにない

➡平安末、鎌倉、南北朝、室町

中世のそれぞれの時期で武士団の教科書的存在

(3)肥後ひいては九州の中世史を体現する存在としての菊池氏／その本拠として多くの歴史文化を伝えてきた菊池

VII 菊之城跡の捉え方

○鎌倉期から南北朝期、すなわち菊池氏が最も大きなスケールで軍事行動を展開していた時期に使用されていた館の跡

○一貫して高瀬をおさえていた菊池氏にとって、活発な軍事行動の継続には大量の物資を迅速に移動させる機動力の保持が必要不可欠

➡菊池川・海上交通と密着した立地を重視した菊池氏本拠の可能性大

菊池氏の根本所領である赤星荘との位置関係も示唆的

○文献史料にみられる「菊池城」は山城か、要検討

Ⅷ 北宮神社の基本性格

Ⅷ-1 菊池三社大明神

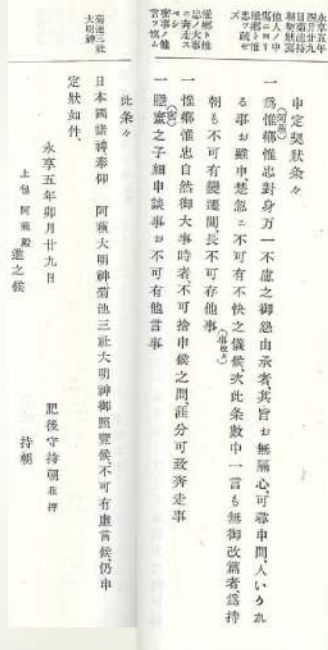
永享5年(1433)4月29日付 菊池持朝契状写
(阿蘇文書)

→菊池氏は「菊池三社大明神」を信仰

○現在菊池神社にある応永10年(1403)大願主肥後守藤原武朝寄進の僧形八幡神像はもと北宮神社にあったもの

→北宮神社の祭神からみて「三社大明神」
=八幡、春日、天満宮ではないか

北宮神社 = 菊池氏の氏神



Ⅷ-2 菊池武朝による一宮阿蘇十二神勸請の意味



VIII-2 菊池武朝による一宮阿蘇十二神勧請の意味

○応永10年、「大願主肥後守藤原朝臣武朝」とその一族は、僧形八幡神像とともに**十二体の神像**を北宮神社に奉納→中世一宮阿蘇十二神像か（萬納恵介氏の神像研究）

➡室町期守護として一国祭祀権を行使するため、菊池氏は自らの**氏神三明神と肥後一宮とを本拠近くで一括**

○室町期守護菊池氏の室町期守護体制下で**府中惣社**（一国祭祀の中心）としての機能を果たす北宮神社

➡菊池川を通じて海（東アジア）と菊池平野部それに阿蘇から多くの供物が搬入、交易が展開

中世菊池一族の始原、連帯、活躍と、室町期守護職の宗教的機能を象徴する存在としての北宮神社

IX 中世における菊之城（深川）・北宮地域の状況

○中世に船着場や石塁堤防があった菊池川乱流域に直面

○氏神・総社と居館との間に市が立つ都市的な場、河川交通の結節点



菊池氏の一貫した軍事活動は北宮の市での社会的分業の編成を基礎としたのではないかと考えられる
→15世紀初頭には一國祭祀機能が加わり、都市的な場として発展したと考えられる



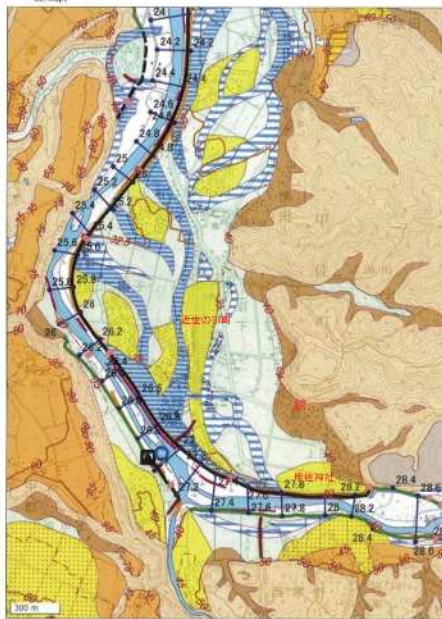
鎌倉時代 備前国福岡の市（一遍上人絵伝から）

X 領主本拠としての類例

阿蘇惟澄の本拠だった甲佐陣ノ内城周辺

緑川
甲佐神社
氾濫原
市

地理院地図



XI 深川・北宮地区とともに繁栄した隈府

○14世紀の征西府・南朝守護所から15世紀の室町期守護所へと発展

○守護権限の行使に関係して多くの人々が隈府を訪問→政庁としての機能が拡充

○客人との対応に必要な館・建物と調度品が集中→発掘成果（中山圭氏の出土遺物研究）

地理院地図

